

第22号 2016年3月

発行／民間相談機関連絡協議会
連絡先（郵便・FAXのみ）
162-0823 新宿区神楽河岸1-1
東京ボランティア・市民活動センター
メールボックス 60番
民間相談機関連絡協議会
FAX 03(3235)0050

そらだん



目次

「相談活動の難しさ」と「奥行きの高さ」に魅せられて 2ページ

平成27年度 活動報告 3ページ

第28回 都内相談機関研究協議会 4～11ページ

『問題解決に導く相談について学ぶ ～ケース検討の再構築』

第19回 定時総会 記念講演 12～19ページ

『涙も笑いも力になる ～子どもたちが教えてくれた大切なこと』

第18回 相談員研修会 20～21ページ

『怒りのコントロールと心理臨床』

勉強会の報告 22～23ページ

『いじめ問題を考える』

ホームページ開設／会員募集のお知らせ 24ページ



「相談活動の難しさ」と「奥行きの高さ」に魅せられて

民間相談機関連絡協議会会長
東京ボランティア・市民活動センター所長
山崎 美貴子

長年にわたって、相談活動にかかわってこられたみなさまにとって、相談活動の難しさに直面し、ひとり、悩まれることはありませんか？

相談担当者は「相談の流れがうまく進みすぎて、これでよかったのかしら？」「今日、お目にかかった相談者の想いを十分受け止めることが出来たのかしら」等と相談者と別れて、ひとりになった時、自問自答することがあります。割り切れなさ、わからなさに直面しつつ、時に、利用者の苦悩や悲しみ、怒りなどの感情の表出に寄り添い続けます。利用者への「呻き」を「呻吟」できるようになりつつあると、自らの成長を認識できるようにするには、とてもたくさんの方が必要かと思えます。

去る2月20日の午後開催しました第29回都内相談機関研究協議会の研修に、講師としておいでいただいた社会福祉法人子どもの虐待防止センター理事 広岡智子さんと、NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク理事長 栗林知絵子さんの講演は、どちらも臨場感あふれるリアルなお話でした。

栗林さんは自称「地域のおせっかいおばさん」の偉大なパワーを発揮して、長年、地域の子どもの冒

険遊び場で培ってきた気づき、発見、見守り、支えの実績、体験を土台にして、新たな活動へと発展、変化しつつ「辛さを背負って生きる子どもたち」の居場所、食事、学習支援を展開されています。子どもたちのつぶやきをきちんと聞き届け、事業として課題解決型の事業へと発展させていかれたプロセスを語ってくださいました。

広岡さんは「言葉にならない辛さを背負って生きる子どもたちと家族の見えにくいSOSに気づくために」どんな相談活動を展開してこられたのか、まさに、自分史を語ってくださいました。

特にお話の焦点は自ら虐待のゆえに子どもを自分の決断で、あるいはご自身の決断ではなく、強制的に手元から離さざるを得なくなった親たちの当事者グループの支援を重ねておられる過程でのご自身の体験を語られました。それは、厳しい自己省察について、自らの呻きを絞り出すような語りでした。

親御さんたちの自分史が子どもを産み育てる体験の中で、忘れていた、あるいは忘れようと努めてきた自らの子ども時代の体験が浮上し、そのトラウマのなかでの怒り、不条理の表出に胸を貸し、寄り添い、言葉にならない辛さ、それを言語化する過程で

直面化するその語りを支援される様子を広岡さんの呻きを通して伝えてくださいました。

広岡さんは「魂とたましいの出会い」と表現されましたが、「私の魂を吸い取られる瞬間がある」と語られました。

広岡さんの深いところで想いや情念を分かち合うことの相談員の役割を語る姿に、相談員としての苦悩の一方で、人としての分かち合える力に、圧倒される思いで聞かせていただきました。

生きることは学びであり、人が人の支えによって苦悩から再び生きる喜びに至る真実を学ばせていただきました。

広岡さんは「魂を吸い取られてしまったときには、甘いものをバク食いしてやっとなんかを取り戻す」とも語ってくださいました。

相談員としての広岡さんの強さ、逞しさ、やさしさ、温かさを垣間見させていただき、沢山の勇気と励めを分かち合う研修となりました。

子どもたちの未来のために、心と体を尽くしておられるお二人に心からのエールを送らせて頂きます。「相談活動」の難しさと奥行きに魅せられた研修

でした。感謝です。

民間相談機関連絡協議会

平成27年度活動の報告

★第19回定時総会

日時：平成27年6月8日（月）

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室

記念講演：『涙も笑いも力になる〜子どもたちが教えてくれた大切なこと〜』

講師：副島賢和さん

参加：44名

第1号議案：2014年度事業報告および収支決算を承認

第2号議案：監査報告

第3号議案：2015年度事業計画（案）

第4号議案：会員入退会について

第5号議案：その他

★第18回相談員研修会

日時：平成27年10月27日（月）

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室

『怒りのコントロールと心理臨床』

講師：大河原美以さん

参加者：57名

★勉強会

日時：平成27年11月19日（木）

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室

『いじめ問題を考える〜映画「青い鳥」を活用したグループワーク』

講師：草柳和之さん

参加者：5名

★相談員研修会Ⅱ

日時：平成28年1月18日（月）

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室

講師：大河原美以さん

参加者：21名 第18回相談員研修会参加者が対象

★ボランティアフォーラム 満点市場

日時：平成28年2月6日（土）

場所：セントラルプラザ区境ホール

★第29回都内相談機関研究協議会

日時：平成28年2月20日（土）

場所：東京ボランティア・市民活動センター 会議室

『言葉にならない辛さを背負って生きる子どもたち〜見えにくいSOSに気づくために』

講師：栗林知絵子さん

NPO法人豊島子どもWAKUWAKU
ネットワーク理事長

講師：広岡智子さん
社会福祉法人子どもの虐待防止センター理

参加者：32名

監事	幹事	
柴田レイ子	山崎美貴子 (会長)	東京ボランティア・市民活動センター
森田邦雅	(副会長) 杉本脩子	NPO法人全国自死遺族総合支援センター
	(事務局長) 堀内由美子	NPO法人朝日カウンセリング研究会
	(事務局長代行) 西岡由香里	社団法人日本てんかん協会東京都支部
	中尾好子	公益財団法人東京カリタスの家
	鶴田桃エ	日本アノレキシア・プレミア協会 (NABA)
	高橋直樹	日本アノレキシア・プレミア協会 (NABA)
	草柳和之	メンタルサビズセンター
	鈴木理恵	個人会員
		NPO法人東京ダルク
		個人会員

都内相談機関研究協議会

問題解決に導く相談について学ぶ

～ケース検討の再構築～

2015年3月9日

発題：山崎美貴子さん「問題解決に導く相談 ～“ひと”をどう捉え、見るか～」
 (東京ボランティア・市民活動センター所長・民間相談機関連絡協議会会長)

講師：朝比奈ミカさん「問題解決を支える相談 ～がじゅまるの事例から～」
 (中核地域生活支援センター「がじゅまる」センター長)

問題解決に導く相談

「ひと」をどう捉え、見るか

山崎美貴子さん

(東京ボランティア・市民活動センター所長)

言葉にならないものを聞く力

日本では縦割り行政の仕組みのなかで、様々な問題が個別の窓口で相談されてきました。ですが、民間相談機関では、特定の問題に限らず多様な生活の悩み・課題についての相談にのる団体もたくさんありますし、当事者の組織による当事者同士の相談もあります。そして昨今では、自治体でもワンストップで様々な相談を受けられるようにという流れが進んできています。そこで今日は、そうした問題を含めて、英語で言うところの「problem-solving approach」となりますが、「問題解決に導く相談」についてお話をします。まず、私が少しお話をさせていただいて、それから、千葉県の中核支援センター「がじゅまる」の朝比奈さんに「問題解決を支える」という視点からお話をいただきます。

それでは、「問題解決に導く相談について」というテーマですが、最近、どの相談機関でも課題になっているのが、そこに足を運んで来てくださる方ばかりではないということ。私は災害の場所に行くことが多いのですが、お子さんやお連れ合いを亡くされた方とか、それから中には、津波が来るときに寝たきりのご主人から「俺はもう動けないから、お

前は逃げなさい」って言われて手を合わせて逃げた方や、特別養護老人ホームの職員で車椅子を2台も3台も押しながら波に飲まれて車いすから手を離してしまったという方もいます。そういう方はご自身自身を非常に責めてらっしゃる。逆に、そういう状況で「逃げなさい、自分の命を守りなさい」と声をかけた方もいます。そういう方は、「自分がそんなことを言ってしまった。それが、一生、十字架です」というふうに語られることもあります。いろいろな方からおられますが、そういう方が自分から相談の場所に来ることは非常に少ないということです。自死念慮を持つっていても、そのことを口にせずにと抱えていらっしゃる方もいます。災害のような場合でなくても、身近なところで、こういうことがたくさんあると思います。

それから、相談に来たとしても、本当に相談しなければならぬことを語るとは限りません。語ることは入り口で、本当に相談したいことがその後ろに隠れていることもあります。今は特にそういう方が多くなって、インターネットならできるけれども、実際に対面して人に話をできない人が増えています。そういう意味で、私たちには「話を聞く力」が非常に求められます。素振りや態度や語尾、あるいは、「あのね…」と言って言い淀まれる、その言い淀まれたところの様子をよくみることです。お話しされるのが一番相談したいことではなく、言葉に出すことを躊躇されているのかもしれない。誠実に心を傾けて聞くということは、言葉で語られたことを聞くこととは限りません。言葉にならない非言語のもの、「あのー、えーと、でもね」という言葉のな

かに多くの意味が入っていることがあります。そのあたりのところをどう読み取っていくのか、もっと言えば「たましいの叫びやつぶやき」に寄り添う力がためられているなど思うことがあります、その人の生きる姿ですね。

「スーブの会」の代表の後藤さんという方が、「相談は信頼関係の入り口づくり」とおっしゃいました。スーブの会は、路上で暮らしてらっしゃる方を支援しているグループで、もう何十年も毎週欠かさず、新宿のあたりでスーブとおにぎりの炊き出しをやっています。そのなかで、「おっちゃん、今日どうよ」っていうふうに声をかけ続けることをしています。時々、怒られたり、怒鳴られたりするそうですが、まず信頼関係がなければ相談は始まりません。後藤さんのこの言葉は、本当に胸に響くものがあります。

私たちが災害の場所に支援に行くと、拒否をされる方が多いです。特に男性で仕事も家族も住む場所も失っていらっしゃる場合には、もう生きることがどうでもいいよって思ってしまう方がおられます。東日本大震災から4年目ですが、ますます事態は深刻になっていきます。先週も岩手に行って、生活支援相談員さんと一緒に勉強会をしましたが、やっぱり「もう来るな」と言われると相談員さんもめげてしまうんですね。でも、それはあなたという人に向かつて言っているのではない。たまたまあなたがそこにいるので、それを表出していらっしゃるんだよと言いたいです。時には犬をけしかけられたり、バケツで水をかけられてしまうようなこともありま

すが、その攻撃や拒否が強ければ強いほど、その人は問題を抱えて悩み苦しんでいると推察できます。

その人の「強み」を探す

どういうふうに相談の糸口をつくっていくかというをお話したいと思います。

私たちは相談を受けるときに、アセスメントシートを使いますね。話を聞くとときに、それを埋めるほうに頭がいつてしまったりしますが、相談に来る方には必ず一人ひとり物語があります。その人が「こんなことでさあ」って話し出したなら、まず、その人の物語をしっかりと聴かせていただく努力をするのが大事です。

けれど、その人の物語を聞いてみると、私たちはどうしても生活課題探しをしてしまいます。そうすると、その人が見えなくなってしまうんです。問題を解決するのは私たちではなくて問題を担っているその人です。問題のほうに引つ張られてしまうと、どういうふうにするか問題を取り除こうかと、問題にアプローチしてしまうんですね。大切なのは、そこをしつかりとその人自身にアプローチすることです。それから、私たちは見立てをします。見立ての時に一番大事なのは、その人の強みを探るといことです。その人だけを見ていると、その強みがなかなか見つけられないこともあります。その人の暮らしや生活の基盤を見てみると、その人の周りには家族がいます。さらに周辺にはその人を支えている資源、たとえば学校の先生や、当事者のグループがあったりというふうには、その人の強みになるような資源が見えてきます。だから、その人の物語を聞く時には、

必ず周辺のことでも聞く癖をつけるとよいと考えます。「誰かに悩みを打ち明けたらいいことありますか?」とか、「困った時、飛んできてくださる方はいますか?」というふうには尋ねながら、その人と周辺の関係性がどうなっているのか、難しい言葉では、「人と環境の相互作用」といいますが、そういうことを見る力です。これを忘れないように私たちの身体にしっかりと埋め込んでしまおう。

地域にはいろいろな資源があります。その資源のリストやマップのつくり方をシートにして皆さんと訓練しています。こうした資源を頭に入れて、「あ、これはあの病院に相談に行ったらいいよね」とか、「これはあの当事者のお母さんに相談できるね」という具合につなげます。地域にはいろいろなグループがあります。あるいは、介護保険だったらケア会議があるし、児童なら社会的擁護の検討委員会、障害の場合は地域の生活相談センターやいろんな自立援助の団体があります。

皆さまの相談機関の所在地には必ず市区町村が発行した「〇〇市の概要」みたいな資料があります。分野別のリストと電話番号が載ったものが、地域センターに置いてあるはずなんです。それは、毎年、改訂されるので、手元に置いておき、使えそうなものをチェックします。もつと進めばそれをマップにする。もつと進めばカードにして、相談をした人のお名前とその時の担当者を書いておくと、次に電話をかける時に「以前〇〇さんのことでご相談をしましたが」というふうにはできます。こうして資源を作って増やしていきます。

相談で大事なのは情報と判断です。今、私たちは、

判断するための情報をいろんな領域や現場の人と一緒に出し合うということをやっています。そういう意味で、利用者の強み探しはすごく大事です。私は、そこに関わり合う道筋、そのプロセスを一緒に歩むというのが相談の本體だと考えます。人には弱い面も強い面もありますが、支援となると、つい弱いところだけを取り上げて改善しようとしてしまうんです。問題にアプローチしてそこを変えればいいと思ってしまうんですけれども、人には弱さと強さの両方がある、そこをどう支援していくのが大切です。

その人を理解し、推察すること

今の話をちょっと整理すると、問題にだけ目を向けて、その人自身を一生懸命理解しようとするんです。そして、理解するために大事なことは深く考へることです。この人は何を言おうとしているのかな、何を一番悩んでいらっしやるのかなと考えます。私たちには感性がありますが、忙しかったりするとその感性が錆びついちゃって、言葉や態度の裏側をしっかりと考察していくことを省いて、気がつかないで流してしまいます。

東日本大震災の被災地で、息子さんとご主人を亡くした奥さんがいました。私とその人と横並びに座ってご飯を食べていた時のことです。その人がぼつんと呟いたんです。「あのなあ」って言って、「父ちゃんがああ、ここんとこ毎晩、夢枕に立つんよ。おいでおいでって言うてるんだろなああ……」って。私はその時、「そうか、夜になると夢でお父ちゃんに会えるね」と返してしまいました。するとその人

は黙ってうつむいて、「うん」って頷きました。ここで私は重大なミスをしていますよね。この人が本当に語りたいのは、「息子もいない、父ちゃんもない、家もなくなつて戻る場所もない。何の希望もないから、もう父ちゃんのところに行きたいんだ」って、きつとこう考えておられたのですよね。でも、私はそれを聞き逃してしまつています。

相談を受けていると、なんとなく心に引っかかる相談ってありますよね。相談室を離れた後もなんだか引つかかっている。この「引っかかる」っていうのはすごく大事なことです。その時の様子、その方の表情をよく思い起こして、それからその人の問題の背景を考えてみると、「これは大変なことをしましたっかかもしれない」と気づくことがあります。

こんなふうにして相談では必ず *Insight* (洞察) が必要です。言葉の後ろ側にあることをよく理解して洞察し、解釈するんです。もしかしたらこの人は自死念慮だったかもしれない、と解釈する。これが相談の非常に重要な要素です。何を見て、どんなことを感じるのか、そして自分がどのような立場に立っているのか。自分が所属する相談機関が扱う問題の領域や、活用する制度や資源、そういった立場性と関係性。これもすごく重要な要素です。私たちはそのなかで相談の入り口をつくっていくというふうに思います。

その人の歩幅で一緒に歩む

ここまでお話ししてきたように、相談される方の話すことは全貌のごく一部です。では、どこから取り掛かればいいのかということですが、

一つ大事なことは、緊急に手を打たなければならぬ内容、命に関わる問題の時には、すぐにどこかと連絡をとったり、介入をするということです。私は、相談には二本のレールが必要だと思つていますが、一つは今言ったような「関わる力」です。そしてもう一つは、「とらえる力」「判断する力」です。その人をわかるうとする力ですね。私たちはその両方のなかで、とりあえず今できるところを探します。いきなり問題の中心に取り掛かるといふのは非常に危険です。いきなり取り掛かるのは生命の問題の時だけです。ここがとても大事なことで、これをスモールステップと言います。その人と歩幅を合わせて、その人の願いを大切にしながら実現可能な選択をします。こちらがその人に必要だと思う課題(ニーズ)と、本人が今こうしたいと望むこと(デマンド)は、だいたい一致しないんです。その時に、こちらが必要だと思うことからやろうとしてしまうと、本人を置いてきぼりにして支援者が主人公になってしまうと思います。問題解決の主体者は利用者その人なんです。とりあえずできることは何かを一緒に探して、本人が願っているところから梯子をかけて、歩んでいきます。

たとえば、その人が「電球が切れちゃったけど交換できないのよ」って言ったとしたら、とりあえずできるのは電球と一緒に換えることかもしれません。それから、「病院に行ってみたいんだけど、一人で行くのが怖いのよ」と言ったら、「ああ、病院に行こうって決心されたんだ。すごいね」って言って、「じゃあ、どうしたらいいか考えようか」って言うふうになります。この人は実は「癌」だとします。

周りの人はみんな知っていて、本人もうすうす気づきながら宣告されることをすごく恐れている。でも、そのことは言葉に出さない。こういう場合に、ニーズでいえば治療が先決ですが、でも、「病院に行こうかな」と本人の腰が上がったなら、じゃあ一緒にどうしたらいいか考えよう、というふうにしていきます。

人は一人ひとり違います。一つやっつてうまくいったからといって、次も同じようにはいきません。毎回毎回の出会いがあります。ただ、相談の入口を築く動機づけがどうしてもできない時もあります。その時にその動機づけをどうつくっていくのか。これができる、本当にもう8割、9割、山を登れるんですね。その人が人としての価値を取り戻す瞬間、「ああ、この人が本当にそこを持つてくださり始めたんだなあ」という瞬間に出会えることがあります。この仕事のおもしろさっていうのは、そういう瞬間に立ち会えて、その方と一緒に分かち合えることだと思います。そういうことがやっぱり問題解決の一番大きな原動力になります。それを英語でself-esteem（自尊感情）って言うのかもしれない。

今日は時間の都合で、私の考えた9のステップの6ぐらいまでしかお話しできませんでしたが、問題解決の入り口づくりに焦点を当ててお話をさせていただきます。

問題解決を支える相談

「がじゅまる」の事例から

朝比奈ミカさん

（中核地域生活支援センター「がじゅまる」センター長）

法律が対応できない問題

中核地域生活支援センターというのは千葉県にしかありません。その現場のなかでいろいろ考えてきたことをお話しさせていただきたいと思います。

中核センターができて10年ぐらいになります。最大の特徴は、とにかくどんな方からのどんなご相談でも受けるということ。それから、24時間365日の相談支援を行なうということです。センターは全県に13か所ありますが、実際には一か所2000万円ぐらいの予算で職員はせいぜい4〜5人です。夜勤体制をとれるところは少なくとも自宅に携帯電話を持ち帰っている状況です。それでも、日中に相談に行けない方たちにどうやって相談の場を保障するかという観点では、非常に重要なフレームワークだと思っています。

日本の社会福祉の法政策は「八法体制」といわれて、対象別になっています。児童と高齢者の間いわゆる稼働年齢層の人は、これまでは特定のカテゴリーに入らなければ福祉の対象にはなりませんでした。そういう状況のなかで、バブル崩壊以降いろいろな社会的な課題が出て、ホームレス自立支援法やDV防止法、ニート・ひきこもりなどへの支援のための子ども・若者育成支援推進法などがつくられます

したが、日本の社会保障政策は、現役世代の支援策が少ないのが現状です。また、複合した問題を抱える家族全体に対して包括的に関わる仕組みがありません。行政は、問題を認知してしまおうと対応しなければならなくなるので、対応していない問題については「存在しない」という建前なんです。

こういう人を想定してみてください。夫から家事を任せられ、二人の子どもを育て、入院中のお姉さんの看病をし、一人暮らしのお母さんの介護を心配するエッコさんという女性がいたとします。たとえば、市役所に行けば「奥さん」って呼ばれますよね。お子さんのことで学校に呼び出されると「お母さん」と呼ばれて、お姉さんの病院で主治医から病状説明を受ける時は「妹さん」って呼ばれて、お母さんのケアマネと話す時は「娘さん」って呼ばれます。彼女をエッコさんと呼んでくれる人は誰もいないんです。お姉さんの主治医から説明を受けている時に、携帯ががが鳴って、見たら学校から着信が入っている。それから、お母さんのケアマネさんからも着信が入っている。その時のエッコさんの心情って、この人は誰も理解してくれません。

がじゅまるの概要

地域包括支援センターは、「地域包括」ということで、本来は全住民の相談にのると定められています。でも、現実には地域包括支援センターが対応しているのは65歳以上の住民に限られます。対象分けると、役割分担論でどうしても死角が生まれます。想定外の事態に対応できないんですね。それから、地域の暮らしは24時間365日の連続性で紡がれて

いるので、切り分けてしまうと見えなくなってしまうことがあります。

そんな状況のなかで、たらい回しにしない相談窓口が欲しいという県民の声に応えて中核センターがつくられました。千葉県内でも地域によって高齢化率や抱える問題などの状況はだいぶ違います。中核センターの運営は民間が委託を受けるかたちです。あまり定めがないのが中核センターの最大のよさですが、運営はだいたいどこも赤字です。私たち、受託した法人が集まって独自に連絡協議会組織をつくってお互いに切磋琢磨をしています。

私が働いている「がじゅまる」というセンターは、東京に近い浦安市と市川市を担当しています。人口は両市で60万人ぐらいです。他の障害福祉の法人や、ホームレス支援や若者支援の人たちと協力しながら事業の運営にあたっています。相談件数は右肩上がりです。今の体制で受けられるいっぱいという状況です。相談が来る時間帯は日中が多いですが、やっぱり一定程度、夜間のニーズもあります。大事な日は、平日の日中時間帯に相談できない人たちにどうやってアクセスを保障するかということだと思っています。

がじゅまるでは月に200件ぐらいの訪問をしています。一日8件ぐらいを職員で分担して、車4台、自転車1台で動き回っているという状況です。相談者は稼働年齢の方が一番多くなっています。相談者のうち障害をもつ方の割合は64・5%ですが、最初から障害者手帳をもっている人は5割ぐらいで、残りは相談の過程で手帳を取っていただくという方

です。そういう意味では、表面的には障害がわかりづらく、見過ごされていた方たちのご相談がとても多くなっています。

他の窓口で受けていただけのご相談は、こちらにご紹介しますので、他でなかなか受けられないご相談や複合的な課題が多いのですが、なかでも一番多いのは家族関係です。行政がなかなか踏み込まないところですね。最近、増えているのは経済的な困窮と住まいに関する事、それから健康不安を訴えるご相談もとても増えています。

相談者の方に共通しているのは、子育てであれ、介護であれ、借金であれ、住まいの問題であれ、とにかく混乱をしていることです。それから解決を諦めていらっしゃる方がとても多いです。拒否というのもその表われの一つだと思います。それから孤立ですね。たとえば介護の負担や経済的な困難、家族関係の悩みがあったり、そもそも生活スキルが不足していたり、そんな状況のなかで関係機関からつながってくるご相談が多いです。関係機関からすると、ご本人や家族の話の聞くだけでは、家庭のなかで何が起きているかがよくわからないんです。だから、課題を整理して欲しいというかたちでこちらに紹介されて来ます。ご本人たちからすると、漠然と生活がうまく行っていないことはわかるけど、機会や経験が不足していて、何をどうしていいかわからない。そんなご相談が多くなっています。

問題解決を「支える」こと

中核センターの相談事例の分析を鳥居深雪先生という方にお願ひしました。鳥居先生は発達心理など

が専門分野ですが、私たちのセンターに寄せられる相談の内容は、障害のあるなしに関わらず、どの年代でも根っこは同じではないかということです。

まず、乳幼児期における愛着の形成とか、世界に対する基本的な信頼感が損なわれている人たちが存在します。人間が社会のなかで生きる根っこになるところなので、ここが損なわれると、どの年代になってもさまざまな問題が出てきます。気持ちとか情動は幹にたとえられます。根っこがちゃんとしていなければ、感情がとも不安定になります。幹がしっかり育つと枝が伸びて葉っぱが茂ります。枝は認知で、行動が葉っぱにたとえられます。根っこがしっかりしていなければ行動もどうしても不安定になってしまいます。ですから、10代まででどういふふうにかこの木が育っていくか、不安定さがあつたり傷がついていたりすると、成人期にわたつて多大な影響を及ぼすというふうに鳥居先生は指摘をしています。

私たちが相談のゴールと考えていることのひとつは、自分でできることとできないことがわかつて、必要な場面でちゃんと助けを求められる力です。アドボカシーというのがソーシャルワークの一つの重要な機能ですが、究極のゴールは「セルフ」なんです。「助けて」って言うことです。そして、「助けて」って言ったら、それがちゃんとキャッチされる。そうしないと人間は生活が成り立っていきません。そのためには、人との関わり方とか振る舞いがとても重要です。他者に助けを求めるためには、伝える力がないといけないんですね。声が小さければ聞いても

らえないし、何を言っているかわからなければ受け取ってもらえません。もし、小さい時に、「助けて」って言ったのに誰にも助けてもらえなかつたら、言っただけで助けてもらえないんだと思って言わなくなりません。

私は今回、「問題解決に導く」という題を、あえて「問題解決を支える」という言葉に変えさせていただきます。ここが重要なポイントだと思います。人生には常にいろんな問題があります。問題を解決するというのは、その人にとって、学習とか成長の重要な機会なんです。結果ではなく解決のプロセスが大事なんですね。そこで学習の機会を得て成長していくということです。

では、健康な自己決定に何が必要かということ、まず、率直に話し、偏りなく聞いて理解することです。たとえば、病院に行つて、病名の告知を受けた途端に頭が真っ白になつちゃつて、そのあとの肝心のことを聞けなくて服薬や生活管理につながらずに病気を悪化させてしまうということがあります。次に、見通しを立てて段取りを組みます。これは家事や子育てや介護にとっても要求されます。皆さんも経験があると思いますが、疲れてくると効率が落ちて段取りがうまく組めなくなるんですね。それから、優先順位を決めます。これも実はすごく大事で、借金を繰り返す人は決められない方が多いんです。あれもこれもなくなって、支出のバランスが取れなくなつてしまふんです。そして、実行に移して最後までやり遂げる。「やるやる」って言うけどやらない場合は、たぶん、やり方がわからないんだと思います。ゴー

ルがわかつていても、そこに至るまでの段取りが組みなかつたらできないんですね。最後に、適切に振り返り、記憶に残しておく。このメモリー機能が働いていないと、同じ失敗を何回もしてしまいます。

助言や指導ではなく「支援」をする

さつきも言ったように、悩みや課題は常にありますが、健康で視野が広く保たれている時には、一個の問題の輪郭もはっきりしているし、大きさもちゃんとわかるので、課題の解決に取り組むことが容易なんです。でも、たとえば不眠が続いたり、挫折が繰り返されたりすると、視野が狭窄していきまふ。そうすると、一個一個の問題が重なつてくつていて見えます。そうすると問題解決のスピードが遅くなつて、狭くなつた視野がさらにふさがれていきます。

じゃあ、私たちが日常でどうやってこなしているかと言つたら、実はあんまり大した話ではなく、他の人の意見を聞いたり真似したり、以前に成功したようにやってみたり、そんなことです。でも、どうしてこれができるかということ、やっぱり社会的な関係があるからです。山崎先生のお話にもありました。周囲との関係があつて個人が維持されているんです。そうすると、私たちは、その個人にしっかりとしろよつて言うだけじゃなくて、周りを整えて、登場人物を豊かに広げていくことがとても重要になってきます。

がじゅまるで出会ってきた人たちはほんの一部で、実際にはつながっていない方のほうがとても多いだ

ろうと思います。つながる力を妨げるものとしては、病気や障害によるコミュニケーション能力の不十分さや、経験の少なさ、未熟さですね。それから暴力や抑圧の結果としての自尊心の低さもあります。自信のなさから、必要以上に自分を大きく見せようとする人もいます。それから文化の違いということもあります。外国人の方のご相談も増えてきています。東南アジアの方は昔から多かつたんですが、最近では旧ソ連圏の方やイスラム圏の方と出会うようになりました。言語の問題だけでなく、文化の違いが障害になることがあります。そういう時に、文化の通訳が必要だと思ひます。

私たちは、相談にいらした方を一所懸命に社会資源につなごうとします。だけど、気をつけなと思ひわぬところで排除が生じます。たとえば、その人が「忙しいから行けない」と言つた時に、本当に忙しいからなのかはわかりません。もしかしたら交通費がないのかもしれない。そういう落とし穴がいろんなところにあります。

世の中、情報をくれたり、助言とか指導をする人はいっぱいいるんですよ。でも、一緒に関わる人っていうのは、あんまりないですね。話を聞いてアドバイスするだけで、その方が問題解決できるかどうかの見立てがないと、たぶんその助言はまったく意味がないんですね。コメントとか批評じゃなくて、支援こそ求められていて、私たちに何ができるかということ、一緒に悩んだり動くことだろうと思ひつていきます。

そのためには信頼関係とコミュニケーションがと

でも重要です。コミュニケーションは一方通行じゃ駄目です。伝わらないのは、こちら側にも責任があります。どういう伝え方がいいのか工夫する必要があります。怒りや拒否は、多くの場合、わからないことへの不安の表明です。わからないと誰でも怖いのです。見通しが立たないと不安になります。できないのは多くの場合、わからないからです。さつきも言いましたが、ゴールがわかっていても、道筋や手順がわからないとできません。

支援者が自分自身のことを理解する

対人援助の仕事をしていると、私たち自身のこと が問われてきます。ご本人を理解するためには、こちら側からその人がどう見えるかということだけじゃなくて、その人から世界がどう見えているかがとても大事なんです。その人と私がつながることに成功したら、そこをチャンネルにして他の人ともつながっていきます。

そのためには、実は非言語のコミュニケーションが重要になります。人のコミュニケーションで言語が占める割合は13%で、残りの87%は非言語だそうです。たとえば、私はセンター長という肩書きです。うちの職員が担当している相談者の方に出っ てお説教をしなければいけないような場面では、服装もちょっとぴしっとした格好をするわけです。それは、「今日は特別なメッセージを送ろうとしているよ」ということを、その方に理解していただくための設定なんです。

事務所でお話をしたあと、駅まで車でお送りすると、面接で聞けなかった話が運転席と助手席の関係

になった途端に聞けることもあります。ですから、ご本人が語る言葉というのは一部で、時間や行為をともにすることでわかることが多くあります。一緒にお買い物に行ったり、片づけをするとか、子どもさんを預かるとか、そういうことでわかることがいっぱいあります。私たちが援助者としてだけではなく一人の人間として、どういうふうに向き合うかということだろうと思います。

もう一つ大事なことは、私が出会った誰かのことを皆さんにお話をする時には、やっぱり私というフィルターを通してあるんです。そのフィルターが無色透明ということはありません。色がついていたり、屈折して受け取る面がありますから、良い悪いじゃなくて、それを分かっていなければいけません。それから、援助行為のなかで虐待が起きてしまうこともあります。起こしちゃいけないことですが、でも、あり得ないという前提はないんです。その時に、やっぱり振り返る視点と環境を私たち自身ももっていないといけないと思います。

無縁社会で起きていること

最近、これからの社会はどうなるんだろうと思うんです。行政は申請主義だし、アパートに入るのも、会社に就職するのも、お金を借りるのも、保証人を要求されますよね。でも、その人のそばにいて、生活や心身の変化をキャッチする人がいない。その人のことを説明できる人がいない。何かあったらその人と関わる用意のある人がいない。これが無縁社会なんだと思います。

そういう状況のなかで、「よりせいホットライン」

ができました。これは、東日本大震災の1年後からスタートした国の補助事業です。いろんなご相談をワンストップ、フリーダイヤル、24時間365日です。受ける仕組みです。一日4万件ほどの電話があつて、とてもアクセスが難しいと言われていました。私もこの事業に協力するなかでつくづく思っているんですが、すごく重篤な相談でもいきなりその話をしてくれるわけじゃないんですよ。日常の些細な話題から入ってきます。そんなことを繰り返し聞いているうちに、「実は・・・」ということ、その向こう側にもものすごく深い傷口が広がっているのがわかるんです。

がじゅまるの相談でも経験しました。「子どもが37度2分の熱を出したんですが、病院に連れていくことが妥当でしょうか」というご相談ですね。私が「今までこういうことがあったらどうされてたんですか？」って聞いたたら、「今までは実家の母に相談していたけど、母が入院して頼れない」という話が出てくるわけです。周りを聞いてみたらその人の状況が見えてきます。電話口の向こうにどんな世界が広がっているかをどれだけ想像できるかっていうことなんです。

現場にいくと、「障害者」の狭き門から排除されてしまった人、特に知的や発達、虐待後遺症を含む情緒障害、それから若年者も含めた認知症、この人たちの排除リスクがとても高まっていると感じます。その昔は、第一次産業や第二次産業で役割を得て生きていた人たちが、創造や応用力が求められる現代社会のなかではじかれていっているんです。知的障害の方

は全人口の2・5%といわれていますが、手帳を持っている人はその3分の1です。特別支援学校を卒業して作業所に通う知的障害者像というのは実はほんの一部で、たとえば、生活の糧を得られずにパンを盗んで刑務所に入ること繰り返す人もたくさんいらっしゃいます。それから、「軽度」といわれる人たちの苦労もあります。日本の診断基準ではIQ60台は軽度知的障害者というカテゴリーになりますが、これは発達年齢では小学校高学年ぐらいです。それで世の中を生き抜いていかなければならない、このサバイバルを想像できるかです。

どの法律の枠組みで動いている相談窓口に行っても実は問題は共通しています。平成27年度から生活困窮者自立支援法が始まりますが、これが縦割りの新たな分野になるんじゃないかと、全体をつなげていく仕組みにならないといけないと思っています。

今後の課題

相談支援ニーズの掘り起こしは今後も進んでいきますが、中核センターもめいっばいです。一対一の相談支援関係を継続してみなさんに保障するのは無理だなあと感じています。問題を潰していくような相談ではなくて、問題解決のプロセスを大事にする相談が必要です。そこで学習や成長をしていたいで、次のトライに自分で、あるいは人の力を借りて立ち向かっていける。そういうエンパワーメント型の相談支援の有用性ということをもっと訴えていきたいと思っています。相談者の方の人生に私たちがずっと伴走できるわけではないので、それを前提に、

今この時に私たちが彼らと一緒に何ができるかを考えていきたいというふうに思っています。

それから、うちの職員なんかもぼやいています。実はご本人とつき合うよりも地域の社会資源とつき合うほうがよっぽど難儀な面があります。使う言語も、ミッションも違います。でも、みんなが一致できないから地域なんですよ。不快感を抱えながらも、ゼロサムじゃない思考態度を私たち援助者は持つ必要があると思います。それから、新しい問題に出会った時に、それがその個人の特異な問題ではなくて、社会構造のなかで起きているという背景を理解する力が重要で、そういう意味では、多分野での言語のすり合わせやぶつかり合いのなかで切磋琢磨していかなければならないと思っています。

これからも地域福祉の枠組みはとても重要ですが、自治会組織を基盤としたこれまでの地域福祉から排除されてきた人たちもいます。たとえば、引きこもりやホームレスや性犯罪被害者やセクシャルマイノリティの人たちが、お年寄り中心の地域サロンで受け入れられるかどうかという問題ですね。排除されがちな人をもう一回、社会の中に包摂していく仕組みは、地域福祉とは別立てなんだろうなというふうな、個人的には思っています。

涙も笑いも力になる

～子どもたちが教えてくれた大切なこと～



2015年6月8日

講師：副島 賢和さん（昭和大学大学院保健医療学研究科 准教授）

学び、そして生きることの保証

僕は院内学級の担任をしています。（ポケットからピエロの鼻を取り出して）いつもポケットに鼻が入っていて、子どもたちと会う時にはこの鼻をつけますので、僕は「赤鼻」と呼ばれています。「パッチ・アダムス」という映画をご存じですか？ 20年近く前の映画ですが、映画で描かれたパッチさんはまだ元気で、毎年、日本にいらしています。僕はあの映画を見た時に、この人に会いたいと思って、彼が日本に来た時に会いに行きました。それでこの鼻をつけ始めたんです。

さて、皆さん、院内学級ってご存じでしょうか？ 実は、学校の先生もあまりよく知らないんですよ。院内学級という言葉はマスコミが広めた言葉で、文科省では病弱虚弱児特別支援学級といいます。僕が子どもたちに説明する時は、「病院の中にある学校ですよ」って言います。院内学級にはいろんな形態があつて、教員が50人位いる病院もありますが、うちの病院は二人です。職員室も何もありません。車椅子に乗っている子が来たり、点滴をつけている子がいたり、ストレッチャーで来る子たちもいます。僕は『さいかち学級』と呼ばれているこの場所で、年間だいたい150人位の子どもたちと関わることをさせてもらっています。

僕が教師として子どもたちと関わる時に一番大事にしていることは、学びの保証です。子どもたちにとって学ぶことは生きることです。学び、そして生

きることに、子どもにとっては当たり前のことを支えています。「患者」である子どもが教室に来た時は「子ども」に戻る。そういう場所を提供しています。小さい子たちは、たとえば遊びをするなかでそういうことをしているのかもしれない。

相手の立場で想像すること

皆さん、病気を抱える子どもたちって聞くと、どんな言葉が浮かびますか？ 小学校、中学校で授業をすると、子どもたちはこんなふうになんか言ってくれます。「かわいそう」「退院できるの？」それからすごく正直な言葉として「先生、近づいてうつらないの？」って言います。「死んじゃうの？」って言う子もいます。なかには自分の経験から「苦しそうだよねえ」って振り返る子もいます。

僕は、子どもたちに聞きます。「皆さんはこの言葉で、どの距離で投げかけていますか？ 遠くで、『自分は入院や病気なんかしたことないよ』っていう立場から言っていないかなあ」って。そして、『当事者意識』っていう言葉があるんだよ」と言います。低学年の子たちにもこの話をします。ただ、当事者意識をもつのは大人でも難しいですよ。そんな簡単なことじゃないですよ。

ある学校で、その話をした時に、「皆さんは学校の先生やおうちの人から、『思いやりをもちなさい』とか、『相手の気持ちを考えなさい』っていっぱい言われるでしょう？でも、どうするのが思いやりをもつことかちゃんと教わってますか？」と聞きまし

た。そして小学校3年生位の男の子がぼっと立ち上がって、「教わっていませんっ」って体育館中に響く声で言いました。周りにいた先生たちはざわつきましたけど、体育座りして聞いている子どもたちは、「うんうん」って頷いていました。そうなんだと思います。

でも、当事者意識をもつ、相手の気持ちになる、思いやりをもつてすごく大事なことです。その気持ちをもつために、僕は二つのことが大事だと思っています。一つは視点を変えるということです。そしてもう一つは、想像するということです。

病気を抱えた子どもたちは、自分のことを駄目だと思っています。勉強もできない。友達とも遊べない。うちの人に迷惑をかけている。そんな僕は、私は駄目だっと思っていきます。でも、駄目だと思っているかもしれないけど、その病気がなったから出会えたことや、分かるようになったことがあるかもしれないねって、子どもたちと話しています。

もう一つは想像することです。想像するっていうのは本当に大変なことです。皆さん、手術を明日に控えた5歳の子がベッドの上でどんな気持ちで夜を過ごしているか想像できますか？ 仕事に忠実であればあるほど、たとえばナースが自分の職務に忠実であればあるほど、子どもたちの心から距離が遠くなります。何時までに食事を終わらせて何時までに水分を摂らせなければいけない。点滴を入れて何時間は寝かせなければいけない。そう思えば思うほど、その子の気持ちから遠くなってしまいます。教師で

ある僕も、そんなことがいっぱいあります。

だから、病気を抱えた子どもたちのことを想像してもらうために、僕は子どもたちが書いた詩を紹介しています。

僕は授業のなかで、子どもたちによく詩を書いてもらっています。僕が子どもたちに「書いた詩に題名をつけてね」って言うと、幸せ、夢、希望、普通、そんな題名をつける子どもが多いです。そういう子どもたちに僕は、「感情を出していいよ」という話をしています。それも特に、不快な感情のほうです。不快な感情を言語化するようにして、感情の適切な扱い方を教えています。学校では、「嬉しい」とか「楽しい」が喜ばれます。でも、その反対に、「悔しい」「悲しい」それから、「苛々する」とか、「あいつ殴ってやりたい」なんかが出てくると、「そういう気持ちは、今ここで出すんじゃない」って言われます。教師や大人によっては、「そんな感情は持ちっちゃ駄目でしょ」というメッセージを伝える人もいます。

でも、感情に良し悪しはありません。どんな感情だって、大事に持っていていいんです。悲しいという感情が人にやさしくするエネルギーになったり、悔しいという感情や怒りを何かに挑戦するエネルギーに変えることができます。ただ、その感情を人に伝える時には、相手の人にきちんと受け取ってもらえる伝え方があります。そのモデルに僕はなれていくかなということを考えながら、子どもたちと関わっています。

子どもたちが教えてくれること

子どもたちはいろんなことを教えてくれるんです。ある中学2年生の男の子がいました。この子は小学校の4年生まで酸素をつけて車椅子に乗っていました。5年生の時に酸素が取れて、中学生になって夢だった運動部に入ったんです。ところが、練習中にグラウンドを走って具合が悪くなって病院に運ばれてきました。そして、ナースから「あなた、走ったら具合が悪くなるって分かっていたでしょ」って注意されました。お母さんからも怒られていました。「いい加減にして。あなた、この病気と何年つき合ってるのよ」って。彼は「だって、あと一周だったんだよ。ほく、みんなと同じことしたいよ」って叫びました。

また、ある女の子は、お友達とハンバーガー屋さんに行って、このハンバーガー食べたらずいなあと思いつつ、「自分だけお友達と違うメニューを食べるわけにはいかなかった」って、具合が悪くなって来ました。ある男の子は薬を勝手に減らしていました。叱られた時に、「だって、この身体、僕の身体だよ。コントロールできるよになりたいよ」って叫びました。そうなんだと思います。この位の時期の子は、命の危機よりも発達の危機を優先します。皆さんも思春期に、友達との約束や自分の挑戦を健康よりも優先させたことがいっぱいあるんじゃないでしょうか。それは、命に関わるような病気を抱えた子どももおんなじです。大事な発達課題です。子どもたちはそれを必ず超えていかなければなりません。

せん。ただ、私たちは駄目だと言います。「休むって言うようになりますい」「薬をきちんと飲みなさい」って言います。僕も心の奥で、そうだよな、そういう時期だよなって思いながらも、がんばって「駄目だよ」と言います。

僕が院内学級の担任を始めた頃に出会った4年生の女の子がいました。彼女は僕に覚悟をくれました。彼女は5歳の時から頭蓋骨を外す手術を繰り返してきてきた子です。彼女は言葉をいっぱい知ってるんですよ。えっ、9歳の子がこんなに知ってるかって、その時は思いましたけど、今ならわかります。5歳の時からベッドの上にいる子ですよ。彼女のお友達の本だったんです。でも、僕、その時、彼女に言ったんですよ。「あなたさあ、言葉、いっぱい知ってるよね。素敵な詩を書くよねえ」って言いました。そしたら彼女は私の顔を見て、にこって笑いながら言ったんです。「うん、先生、私ね、もし大人になれたら詩人になりたいの」って言ったんです。「もし」って言ったんです。それまで僕は、生徒たちに「お前の夢は何だ？」って言って夕陽に向かって走るような教員でした。その僕に向かって彼女は「もし」って言いました。大人になることを当たり前だと思ってる子どもたちがいるって分かっています。だって、僕はそういう子たちと関わりたいたと思ったから、院内学級に行っただけです。でも、実際、目の前にしたら、なんかもう自分の薄っぺらさとか、考えの浅はかさを突きつけられた気がしま

した。

どんな感情も否定しない

僕は、図工や家庭科の時間に、紙粘土でお弁当をつくる授業をやっています。この授業を最初にやるうとした時、医療スタッフから「え、先生、ご飯を食べられない子もいるのにやるんですか？ 悲しかったり悔しかったりするじゃないですか」って言われました。でも、だからこそやるんです。怖いのは、自分のなかにある悲しいとか悔しいという感情に蓋をすることです。つらいよね、悔しいよね、悲しいよねっていうことを一緒に語り合う。それが、自分のなかにある荒ぶる感情をきちんと引き出しにしようための大事な作業なんです。だから、子どもたちに「今、何でも食べていいなら何を食べたい？」って言いながら、一緒につくります。今は、病棟のスタッフたちも分かってくれて、「美味しそうねえ。看護師さんにも一個ちょうだい」って、食べる真似をしてくれるようになりました。

僕たち教師は、子どもたちの声に耳を傾けなさいって言われます。そうすると、教師は子どもに言語化を求めているんですよ。例えば子どもがけんかをしたら、「なんでそんなことしたの？ 理由を言いなさい」って言います。この休み時間のうちに仲直りさせなさいと思うと、もう慌てるようにして、「先生にちゃんと伝えなきゃちゃんと伝えてあげるから、仲直りできるから、ちゃんと説明しなさい」って、一

生懸命に言います。

でも、言語化できるくらいなら、誰かを叩いたり暴言を吐いたりしないんですよ。僕が出会ったのは、そうやって行動化するのではなく、身体化する子です。頭が痛くなったり、お腹が痛くなったりする子です。ただ、行動化や身体化をされると、それを聞く僕たちにとってはやっぱり「ノイズ」なんです。できれば聞きたくないですよ。ちゃんと言葉で言ってくれば分かるのにも思います。でも、このノイズは彼らが一生懸命に発したシグナルです。その後ろに必ず彼らのメッセージがあります。必ず彼らなりの理由があります。そのメッセージを聞くということが、子どもの声に耳を傾けることなんだと思っています。

ただ、こういうことをされた時にノイズだと思うのは、大人だけではありません。大人の声を真面目に聞いてやっつてる子とか、泣かないように怒らないように一生懸命過ごしている子たちからすれば、「ふざけんじゃねえぞ」と思って当たり前です。そういう子どもたちの声もしっかり聞けるようになりたいなって思っています。

皆さん、子どもが「お腹が痛いよー」って言ったら、最初に何て声をかけてあげますか？ だいたい5つくらいあるなあと思います。

一つ目は対処法です。これは、医療者に多いんです。お腹が痛くなる理由がだいたい分かっているから、「温めましょうか？」って言います。二つ目は

原因究明です。学校の先生に多いですね。「どこかにぶつけたの？ 誰かに叩かれたの？」って聞きま
す。本当は「ああ、痛いんだよねえ」って受け取っ
てあげなきゃいけないって分かっているんですよ。で
も、ついこつちを先にやっちゃいますよね。

心配だなあと思っているのが「共感的同情」と「否
認」のふたつです。子どもが「お腹が痛いよー」っ
て言った瞬間に、「はいはい、保健室に行きなさい
よー」って言う先生を見ることがあります。それから
すっごく心配なのが否認です。子どもが「お腹が痛
いよー」って言った瞬間ですね、「あー、痛くない、
痛くない。大丈夫」って言う人がいます。これ、結
構、多いんですよ。街中でも、子どもが転んで、「痛
くないでしょー」とか言われて、お母さんに引きず
られてる子どもがいるじゃないですか。いや、痛い
ですよ。（会場笑）大人は自分が身体に感じてい
るものと違うメッセージが来た時に、「あなたはそ
う思うんだ。でも、俺は痛いんだもん」って思えま
す。でも、子どもは違います。自分の大好きなお父
さんやお母さん、尊敬している先生から「痛くない
でしょ」って言われたら、自分の身体の感覚が間違っ
ているのかもしれないって思います。「この位で痛
いって思う僕は弱虫なのかな。私は駄目なのかな」
そういう子どもたちをつくり出してしまふ言葉です。
すっごく危ない言葉だなあとというふうに思っています。

子どもの感情を壊すのは実は簡単なんです。この
話は保護者会とかでよくお話しします。「子どもを暴

発型に育てたいならこうするといいですよ。自己中
心的や無気力に育てたいならこうですよ」って。

暴発型の子どもを育てたい時はですね、子どもた
ちが泣いたり怒ったりした時に、「泣くな」「怒る
な！」ってがーっと力でねじ伏せてあげてくださ
いって言います。力でねじ伏せると子どもたちは泣
かなくなりません。でも、それは決して、収まったわ
けではないんです。蓋をしただけです。蓋をしたも
のは必ず開きます。フラッシュバックと呼ばれる状
態です。時間を飛び越えて、その蓋が開く時があり
ます。そうなる子どもたちは自分でコントロール
ができなくなります。いわゆる「キレる子」を育て
たいなら、子どもたちの不快な感情を力でねじ伏せ
てあげてくださいって言います。

それから、自己中心的でわがままな子どもを育て
たい時は、子どもが不快な感情を味わう前に、全部
取り払ってあげてくださいって言います。そうすれ
ば、子どもは自分のなかにそんな不快な感情があ
るって知りません。でも、学校に来ると、友達や先
生との関係、自分の成績などで不快な感情をいっぱ
い味わいます。隣の子どもが不快な感情を自分に味
あわせたら殴りたくなるかもしれません。先生の言
うことなんか聞きたくありませんよ。教室から飛び出
したくなるかもしれません。周りからは、なんて自
分勝手なのって言われます。そんな子どもを育てた
かったらどうぞそうしてくださいって言います。

それから、今、増えている心配なのは無気力な子
どもです。無気力な子どもを育てるなら無視をする

ことです。学習性無気力と呼ばれるものです。子ど
もたちが一生懸命、感情を訴えた時に、知らない振
りをすると、子どもたちは感情を表わすことを止め
ていきます。だって、表わしたって意味がないから。
感情って不思議なもので、悲しいとか悔しいに蓋を
すると、嬉しいとか楽しいにも同時に蓋がされてい
くんですよ。人間にとつて、感情に良し悪しはない
から、同じように蓋をされていくんです。そうする
と、表情がなくなつて、ぼーっとしていきます。集
中することも、記憶もできなくなつてしまう状態
です。これは、過去に傷つきがあるタイプの子です。
いじめや虐待を受けている子、被災地の子どもたち
もそうです。自分の力ではこの世の中はどうしよう
もないんだっていうことを叩き込んであげると、子
どもたちは無気力になっていきます。

「こうやって、子どもの感情なんて簡単に壊すこ
とができますよ」って、保護者会でお話をしています。

ただ、子どものいろんな感情を否定せずに受け取
ると、子どもと一緒にいるのがつらくなることもあ
ります。僕のスーパーバイザーは東京学芸大学の
小林正幸先生という方ですが、僕は彼のところに
行って、「もうどうしようもなくつらいんだ」って
話をしたことがあります。その時に、彼から「怒り
は、願いだよ」って言われました。怒りには、「お
前、嫌いだ」っていうメッセージが一緒に乗っかっ
てくるからつらいです。でも、「怒りの向こうには
必ず願いがあるんだよ」って言われました。それは、

周りの人にとっては理不尽な願いかもしれませんが、その子にとっては大事な願いです。だから、その願いを聞きなさいって言われたんです。怒りをもっている子どもの、この願いは何なのかなって見るようにすると、ちょっと聞けるようになりました。

それから、「哀しみは、苦境を分かち合って欲しい、助けて欲しいという訴えだ」と言われたんです。その訴えを聞きなさいと言われました。僕は、泣かれないでちょっと傍にいられるようになりました。喜びは、誰かと分かち合うことで加速されますから、たくさん喜びたいと思っています。そして、恐怖や不安は「できるだけ早く取ってよ」という強い願いなので、それに力を注ぎます。

先ほどの、「そんな感情もっちゃ駄目だよ」というのと違って、「怒りや悲しみ、恐怖や不安があなたのなかにあるよね」と認めたうえで、それをどうするかを一緒に考えていこうって言う関わりです。これが、「どんな感情も持っていんだよ」というメッセージにつながると思っています。

「受容」と「許容」の違い

こうやって子どもたちと関わっていると、「そんなに優しくして、子どもたちが退院したくないって言ったらどうするんですか？」って言われることもあります。ある学校の先生からも「副島さん、教員だからわかるでしょ。学校は集団も育てているんですよ。一人ひとりの感情をそこまで聞けないよ」っ

て言われました。僕はその時うまく答えられませんでした。でも、今なら言えます。「受容はするけど許容はしない」という言葉を見つけたからです。受容は感情を受けとめることです。許容は行動を容認することです。感情はしっかりと受け止めますが、駄目なものは駄目だと言います。僕も教員になりたての頃はここがすごく曖昧でした。子どもたちが、ぎゃーってなる雰囲気を感じると、「うん、じゃあ校庭で遊ぼうか」みたいにしてしまう時期もありました。でも、今はここをがんばります。それも、誰かに迷惑がかかるからではないです。あなたを守るために、それはさせられないっていうことをがんばります。

子どもたちは「薬なんか飲みたいくないよ」「注射なんかやりたくないよ」「なんで入院してるのに勉強やんなきゃいけないの？」って言います。そうすると、大人は何て言いますか？「薬を飲まなかったら退院できないよ」「注射しなかったら治らないわよ」「学校に戻った時、勉強が遅れたらどうするの？」って言います。でも、子どもたちの言葉をよく聞いてください。あの子たちは、「やりたくない」って言うんですよ。「やらない」なんて、よほどのことがない限り言いません。やらなきゃいけないって一番分かっているのは、あの子たちです。「やりたくない気持ち聞いてよ」って言ってくれているんだと思います。だから、彼らの気持ちをいーっぱい聞いたあと、彼らの背中がちょっと柔らかくなったら、「はい、やるよ」って言います。そ

うするとあの子たちは、うまくいかなかった時の保険をかけて、「先生に言われたからやるんだからね」「うまくできなかったらすぐやめちゃうからね」とか言いながら、それでもちゃんと向かってくれます。「やりたくない」と「やらない」には距離があるというのを、関わる大人は分かっている必要があると思います。

もう一つ大事にしているのは、「do」と「be」です。これは上智大学の長島正先生がおっしゃっていました。「何かができる」というdoではなく、「そこに存在していることだけで価値がある」というbeを彼らに伝えたいと思っています。学校は、何ができたり、何が分かかったりする場所です。だから、doをやらなければなりません。でも、そればかり子どもに突きつけていたら、そりゃ無理ですよ。だって、世の中にはできないこと、分からないことの方が多いです。でも、そうしてあの子たちが膝をついたとしても、「よっしゃっ」て、また自分の力で立ち上がって進んでいくためには、「あなたがそこにいることは、それだけで素敵なことなんだ」って、「それだけで価値があることなんだ」っていうのを知っている大人がそばにいることを伝えたいと思っています。

「ほくは幸せ」

6年生の男の子がいました。彼は生まれつき消化器系に疾患があつて、おうちよりも病院のベッドに

いるほうが長い子でした。その彼が小学6年生の10月に、もう久しぶりの退院が決まったんです。彼は満面の笑みで教室に入ってきました。僕は彼の傍に寄って、つんつんってやっただんです。「退院だって？」って聞きました。そして彼は僕の顔を見て「先生、ほく、幸せなんだあ」って言いました。「そうかあ、幸せかあ。どんな時に幸せって思うの？」って聞きました。そして、彼が教えてくれたんです。「おうちにいられば幸せだよ、先生」って言いました。「そうだねえ、他には？」って言ったら、「うん、お母さんとお姉ちゃんとお父さんといられたら幸せ」って言いました。「他には？」って言ったら、「ご飯が食べられれば幸せだよ」って言いました。彼は自分のことを「鼻管（はなくだ）王子」って呼んでました。鼻から経管で栄養を摂っている子だったから、なかなか口からご飯を食べられなかったんですよ。口から食べる時には、ドロドロのおかゆでも嬉しそーうに食べていました。「他には？」って聞いたら、「退院したら犬を飼ってもらうんだ。学校に行くと、友達と遊ぶんだ。勉強するんだ」っていっぱい聞かせてくれました。僕はもう嬉しくなると、「他には？」って聞いたんですよ。そして「他には？」って聞いたんですよ。空がきれいだと幸せかなあ」って言いました。そして彼が言ったんです。「ねえ、先生」って。「なあに？」「ねえ、先生、僕ね、みんなが幸せと思わないことも幸せに思えるんだ。だから、僕の周りには幸せがいっぱいあるんだよ」って言ったんです。

僕は、「ね、これ詩にしよう」って言いました。彼は、「ええーっ」って言いました。そりゃそうですよ。6年生の男の子が、お母さんと一緒にいられたら嬉しいとか、空がきれいだと幸せとか、清書したのを廊下に貼られたらきつと恥ずかしいですよ。だけど僕、彼に、「お願い。詩にして」って言いました。そして彼が嬉しそーうにね、「しよーがねーな」。最後だから書いてやるか」って言ったんです。でも、残念ながら彼にとつてその詩は最後の詩になりました。

退院して1か月、彼は本当によくがんばりました。スピーチ大会で将来の夢を語りました。学芸会では座敷わらしの役をやったんですよ。係もいっぱいやりました。ちょっと顔がむくんでいたから、僕、いつものように彼に「どお？」って聞きました。そして彼は、「あ、平気平気。楽しいから」って言ったんですよ。でも、今、考えたら、うん、きつとわかってたんだよね。

学芸会が終わった次の週に、彼は救急搬送で運ばれてきました。僕がその連絡を受けたのは小学校の職員室でした。夜の7時半で、この仕事が終わったから行くねって思ったんですけど、仕事が終わったのは7時55分でした。今は夜の1時だろうと2時だろうと、病院に行くと「さいかち学級の副島です」って言ったら通してもらえ関係をつくりました。でも、その時は、夜中に行く、「何かご用ですか？」ってナースに言われる関係しかつくりていなかったんです。だから僕ね、帰っちゃったんですよ。面会は

夜8時までだったから。病院の前を通った時、交差点を渡って、彼がいるだろう病棟を見上げて、「また明日、来るね」って呟いて帰ったんです。

でも、次の日に行ったら間に合いませんでした。もう二度と子どもたちのことで「明日でいい」って思うのはやめようって決めました。彼が書いてくれた詩は今でも病棟に貼ってありますし、僕も大事に持っています。本物は、おうちの彼の写真の横に額に入れて飾ってあります。でも、廊下に貼ってある彼の詩の前を通る時に、ごめんねってやっぱり思います。だって、明日にしちゃうことはいっぱいあって、明日にするのはもうやめようなんて、なかなかできません。

成長の連続性を保証する

さて、皆さん、病気を抱える子どもたちに教育が必要だと思いませんか？ だいたい皆さんが「必要だよ」って答えると思います。教師もそう言います。僕も病気をしている子どもたちに、「今はしっかりと治す時だよ。ゆっくり休んで元気になったらおいで」って言ってきました。でも、この言葉は、ある子どもたちにとってはすごく酷な言葉です。

たとえば小児がんの子どもたちは、寛解しても再発する子もいます。筋ジストロフィーの子どもたちなんかは、じわじわ下がっていきます。精神疾患の子たちのなかには、すとーんと落ちたまま、下をずーっと這うような子どもたちもいます。僕は教師をやっていた時、そんな子どもたちに向かって「元

気になったらおいで」って言ってました。待つてるよっていう気持ちに嘘はないです。でも、こんな酷な言葉はないなあって思います。今は、教育が医療と福祉と地域社会とつながること、この子たちを救うことができるんじゃないかなあって思っています。

子どもたちは、退院してから久しぶりに戻ってくるといろんなことを教えてくれるんですよ。あるI型糖尿病の子は、自分の体を低血糖から守るためのクッキーを、「みんなに見られたくないからトイレで食べてた」って言いました。自分の命を守るためのものを、トイレの便器の上で食べる時の気持ちってどんなだろうって思います。

学校のことを、「あそこではいつも僕、お客さんなんだ」って言った子がいました。「分からないって言えるわけじゃないじゃん。もう勉強、通り過ぎてるんだもん」って言った子もいました。他にも、「私が悪い子だから病気になるんだよねえ」、「小さい頃の写真、見たくない」、「これ以上どうがんばれって言うのよ」、「治らなかつたらどうしよう?」、「どうせ自分のことだから」、「ごめんさい、ごめんさい」って、そんな否定的なイメージをいっぱい持っている子どもたちがいます。

でも、「自分は駄目だ」「一人ぼっちだ」「愛されていない」「役に立たない」って思っている彼らと、一緒に学習し、遊び、関わることで、「いや、俺ってなかなかイケてるよね」「役に立ってるよね」「先

生に褒められた。認められたよ」「おうちの人が喜んでくれた」「友達もいっぱいいるよ」って肯定的なイメージをもたせることができます。それをやるのが教育の役目だというふうに思っています。

皆さんは子どもたちの入院日数がどの位かご存じでしょうか? うちの病院では、小児科の平均在院日数は6日です。子どもたちは6日で退院していきます。でも、これは全国的に見ても短いというわけではありません。なぜなら今、全国的な平均は10日だからです。重い白血病の子でも、10年前は80日位だったのが、今は40日位になっています。できるだけおうちに帰ろうっていかたが行なわれていきます。

ただ、すごく心配なのは、何度も入院を繰り返す子が増えているということです。ちょっと前に、中学生の女の子が1年間に7回、入院してきました。1年に7回も学校から抜けるんです。勉強もそうですが、たとえば大事な友達と内緒の話をしたり、彼氏をつくったり、そういう大事な発達課題からどんどん抜けるんです。そういうことがいっぱい起きています。

僕は病弱教育を担う者として、子どもの生活や成長発達の連続性を保証しようと思っています。でも、入院治療はこれを切り取ってしまいます。最初、医療を見た時、「なんで切り取るんだ?」って思っていました。でも、治療って切り取らないとできないんだとも思います。だから、そこに教育的な関わり

が必要なんだと思っています。でも、今はこれをもう少し俯瞰して見ているんですよ。彼らが発症して退院して、復帰したその先の家庭や学校や社会、大人はそこまで考えて子どもたちの連続性を保証しなければいけないと思っています。

困難や課題を中心に置いたチーム

病気を抱えた子どもたちのなかで、入院している子は2割です。8割の子どもたちが病気の治療をしながら病院の外で生活をしています。北海道大病院の緩和ケア病棟にいる田巻先生というドクターから「先生、ピエロをやってくれない? 緩和ケア病棟に来て、子どもたちと会ってよ」って言われたことがありました。僕は、よっしゃって思って、ちゃんとメイクして、道具抱えて、鼻をつけて病棟の前に行きました。僕は中に入る前に、ドクターに「具合の悪い子がいたら気をつけなさい」といけなことをもう一回、確認させて欲しい」って言いました。したら、彼は「いや、先生、子どもたちはみんな元気だよ」って言ったんです。僕が会ってくださいて言われた子どもたちは、自分が病気じゃなかったんです。お父さんやお母さんが緩和ケア病棟にいて余命を告げられている子どもたちでした。そういう子どもたちがこの世の中にいっぱいいるんだということ、あらためて認識しました。でも、学校はそれが分かんないんですよ。喧嘩っ早い子や宿題やってこない子、授業中ぼーっとしている子の後ろに、もしかしたらこういうことがあるかもしれないこと

を、関わる大人は分かってなきやいけないよって先生たちに伝えていきます。

僕は、そういう子どもたちと出会って、「病気を抱えた子どもたち」という言い方をあまりしなくなりました。「病気による困難を抱えた子どもたち」という言い方をしています。もちろん自分が病気の子どもいるでしょう。でも、大事な家族やきょうだいや友達が病気で、その影響で苦しんでいる子どもたちもいっぱいいるというのが分かりました。だから、病気による困難を抱えた子どもたちを支えるために大事なものは、いろんな人とつながってチームで関わることです。ただ、チームっていつた時に、子どもを真ん中に置いて関わるのはちよつと違う気がしています。子どもは真ん中じゃない。真ん中に置くのは、子どもが抱えている困難や課題です。これを教えてくれたのは、小学校1年生の男の子です。彼は僕に言いました。「先生、僕のこと、僕も知りたいです」って言いました。そりゃ、そうだよなって思いました。ある中学生の女の子からも「私のいないところで私の話、しないでよ」と言われました。大人が集まって、その子のことを一生懸命、考えます。でも、いつのまにか、そこに子どもがいないんです。「何が当事者意識だ」って思いました。子どもの困難や課題を真ん中に置いて、それを乗り越えるためにどうやっていこうかって、子どもたちにもチームの一員になって考えてもらう必要があるんだと思っています。

最後に小学校4年生の女の子が僕に教えてくれた言葉を紹介します。彼女は脳の奥の深いところにおできができました。そのおできが脳を壊していきまです。でも、お医者さんからは「もう触れません」と言われました。その彼女にベッドの上で授業をしたことが何回かあります。ある日、ナースから電話がかかってきて「先生、1時間だけなら教室に行けるよ」って言われたんです。僕は、よっしゃって思いました。さあ何やろう？って。彼女は絵を描くことが大好きな女の子でした。だから、虹の絵を描く授業にしました。彼女はクレパスを使って、一生懸命に絵を描いてくれました。でも、まだ白いところがいっぱいあります。手も首もずっと動いているから吐き気があります。もう自分で歩けないので車椅子でした。その彼女が描いてくれた虹の絵、本当に素敵でした。「これ、必ずおうちに持って帰るんだよ」って言いました。彼女、「うん」って言ってくれたんです。

でもね、僕ね、彼女の絵が欲しかったですよ。その絵でなくていいから。だから僕、彼女に「あなた、素敵な絵を描くよねえ。さいかち学級に飾る絵、描いてくれないかなあ」って言いました。そしたらもう、忘れもしません。彼女、僕の顔を見て、にこーっと笑って言いました。「はい、先生。お役に立てれば喜んで」って言ったんです。9歳の女の子がですよ。毎日、何かひとつできなくなっていく、その彼女がです。こんなおやじの頼みに「お役に立て

ば喜んで」って言うてくれました。でも、結局、絵を描いてもらうことはできませんでした。でも、こんな素敵な言葉を彼女にももらいました。だから、どんなに疲れてても、どんなに大変でも、病気の困難を抱えている子どもたちや、そのご家族のがんばりを伝えられるのであれば、もう全国どこへでも行くって思っています。

支援者自身が受けとめてもらえる場を持つ

今日は、苦しんでる子どもたち、それからご家族や周囲の方々の感情を受け取って大事にしてあげてくださいってお話してきました。でも、誰かのつらさや悲しさや苦しみを受け取るためには、自分もつらさや苦しさを悲しさを受け取ってもらえる誰かもたなければ、絶対に無理です。医療者だから、教育者だから、肉親だから、そりゃ、最初はがんばります。でもね、本当につらい時に、やっぱりシャッターを降ろしてしまいます。相手を突き放して、つらい思いをさせてしまいます。そうしないためには、ぜひ皆さん自身のつらさや悲しさや苦しさを受け取ってくれる誰かを必ずお持ちください。その仲間や時間や空間を大事にしていきたいと思えます。そして、せつかくご縁をいただいたので、その仲間に僕も入れていただけると嬉しいですよ。

怒りのコントロールと心理臨床

2015年10月27日、2016年1月18日

講師：大河原 美以さん

(東京学芸大学教育心理学講座 教授 臨床心理士)

相談員研修報告

東京学芸大学教育心理学講座教授 大河原美以先生を講師に「怒りのコントロールと心理臨床」というテーマで2015年10月27日に相談員研修会を開催いたしました。

「感情をコントロールする力は、愛着の関係を基礎として育つ脳の機能です。泣いているときに抱かれて安心しておさまるといふ関係性の中で、感情制御の神経回路が育つのです。しかし、怒らない子・泣かない子が『よい子』とみなされる文化の中で、怒りや悲しみ、嫉妬などの負情動は居場所を失い、暴走せざるをえない防衛を身につけてしまいます。怒りの暴走に戸惑う人たちを支援する上で最も重要なことは、このメカニズムを正しく知ることです。」とのメッセージをいただきました。

感情に良い悪いはないこと、恐怖や痛み不安、怒り、悲しみ、つらさ、などネガティブといわれる感情をしっかりと受け止めてもらうことが、自分で湧き起こった感情をどのように表現するかの自律につながることを教えていただきました。これは脳機能の発達の上で重要なことで、子どもの感情や体の感覚を評価せずに、ありのままに認知できることが健康な育ちです。例えば、子どもが転んだ時に親が「痛くない。泣かない。」と痛みも感情も封じ込めてしまふと子どもも感じなくなってしまう。これは子どもの脳は体の痛みや感情を遮断してしまうからです。子どもの脳はまだ未成熟なので繰り返し痛みや感情を拒否したり、無かったように扱ふと無表情になつていきます。大きくなつたときに、不安や困難な状況になつたときに、表現方法を知らないことで「キレル」とか「怒りを爆発させて攻撃する」こと

になつたりします。また、インターネットの中では無記名でよいので、批判や中傷、攻撃やいじめなどが蔓延しているのは現代日本において特徴的です。

〈受講者からよせられた感想〉

・感情に良し悪しはないし、言葉にして認めていくことが、安定感につながっていくことを学びました。心を脳機能と構造で説明していただきよく理解できました。深呼吸や安心のイメージが心と認知を結ぶ手掛かりになることは実践します。

・怒りの反芻への対応、「呼吸・安全な場所・好きな色のイメージを使うこと」をさっそく実行します。

・ネガティブな感情に対する安心安全に承認することの大切さを理論的に理解できた。自分の子育てを思い出し、反省した。電話相談員として、怒りが増加し、こちらに怒りが向いてくる場合も多い。呼吸法やこちら側の安心安全な場、距離についても考える機会となつた。

・はじめは子どもの問題かと思つていましたが、大人の理解にもつながる大切なお話でも参考になりました。子どものかかわりも大切ですが、母親のケアの重要性を痛感しました。

・キレル要因をしっかりと学習できた。安心に向けてのメッセージは家族や本人に対するアドバイスにも

活用できそうに思える。人間の持っている複雑なメカニズムをわかりやすく説明してもらえて職場で活かしたい。

・相談員としてだけではなく、日常生活にも役立つ講座でした。怒り、悲しみを表現するのは苦手でしたが、まずは「怒っている」「悲しい」と言葉にしてみます。

大河原美以先生の「子どもの感情コントロールと心理臨床」をご紹介させていただきます。また、講座の中で取り上げられた子どもの気持ちをとり上げたデザイン映画「インサイド・ヘッド」もぜひご覧ください。

※図版1（大河原先生 著書）



※図版2（インサイドヘッド）



大河原美以先生に「怒りのコントロールと心理臨床2」で2016年1月18日に再登壇していただきました。

1回目の相談員研修受講者および「子どもの感情コントロールと心理臨床」を読んだ方が対象で、ワークを通し、怒りの感情変化を見ていくものでした。怒りの体験を語った後に、具体的にイメージを絵に描き、次に安心で好きな色で包み込むように色付けしていくことで、再度話した時には気持ちの変化を実感した貴重なものでした。自分自身の怒りや悲しみを表現することの大切さを感じました。それは表情や体の硬さ、言葉にも表れていることを味わいました。普段はお話をお聴きする立場の参加者にとつ

て、自分自身のありのままの感情を承認し、大切に扱うことは、相手を大切にすることにもつながることを学びました。

大河原先生の2回にわたるご講演は、実践的で自分自身にも周りの人たちとも活かしあえるものとなりました。先生に深く感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

西岡由香里

勉強会

いじめ問題を考える ～映画『青い鳥』を活用した グループワーク～

2015年11月19日

講師：草柳 和之さん（メンタルサービスセンター代表／大東文化大学非常勤講師）

2013年に「いじめ防止対策推進法」が施行されたのは周知の通りですが、残念ながら、その後もいじめ自殺事件は止みません。昨年7月、岩手県矢巾町の中学2年男子生徒が、度重なるいじめを苦に、電車へ飛び込んで自らの命を絶ち、担任や学校側の対応が問題視された報道がありました。幹事会で勉強会の企画が検討された際、現在、緊急度が高いテーマで行うことになり、いじめ問題が選ばれました。講師の草柳は、かつて自治体の設置する教育相談の現場で学校と連携しながらいじめケースに携わり、さらには、自ら主宰する相談機関「メンタルサービスセンター」にて、いじめ自殺遺族のカウンセリングを何例も経験してきました。多くのいじめ問題の講演を行い、共著の本も執筆しましたが、これらの経験から創案したグループワークを、今回実施しました。

勉強会では、同問題をユニークに描いた映画『青い鳥』（主演：阿部寛）を活用しました。以下があらすじです。「いじめにより自殺未遂したクラスメイトが転校して去った学級の臨時担任に、一風変わった教師が赴任してきた。吃音のある彼は、撤去された被害生徒の机を教室に戻させ、毎朝、ぎこちなく『野口君、おはよう』と声をかけた。反省文を何度も書き、一件落着いたと思っていた生徒たちは動揺し、騒動が起こり始める。学校側は表面的ないじめ防止運動を熱心に行い、事なかれの発想と、物事を抑え込む対応で、『何かがおかしい』と思う人がいながら、そのまま日々が過ぎる。そして被害の実態が明らかになる——野口君は、多くの生徒から親の

経営するコンビニの品物の万引きを何度も強要されたのだった。野口と親しく、自らもいじめに加担した生徒は、これらの経過に深く思い悩んでいく。臨時担任の無骨に過ぎるような言動は、僅かだが生徒達の姿勢を変えていった……」

グループワークは次の手順で行いました。まず本編を観た後、検討すべき問題シーンの会話（今回は3場面）が記された資料が渡されます。その一つを紹介しましょう。

【学校の職員会議の場面】

校長「（これ以外の考えは許さないぞ）という威圧的な口調で、静かに喋る）確かにあの事件に関しては、我々にも反省すべき点がありました。ムラウチ先生（臨時担任）には、先生のお考えがあり、それは尊重致します。しかし今、我々が考えるべきことは、この学校を一刻も早くいつもの日常の生活に戻してやることです。私はよく学校を船に例えるのですが、一番大切なことは、子どもたちを全員、一人も欠けることなく卒業という港まで無事に運んでいくことだと思っております。残念ながら、野口君は〇〇中学という船を自ら降りる結果となってしまった。でも、この船にはまだ残りの365名の生徒が残っている。我々には彼らを全員目的地まで送り届ける義務があります。お分かりいただけますね。」

ムラウチ先生「船酔いした生徒は、どうするんですか？ 野口君は船を降りたくなかった。絶対に降

りたくなかった。2年1組には、野口君の机は必要だと思えます。」

【手順】

①各参加者は、例示した場面について、誰の立場で考えるかを決めます。今回は、A) 被害者/B) 加害生徒/C) 加害生徒の親/D) 大多数の教師の立場を設定しました。

②ライティングのためのシートが配られます。そこには、抜粋した3つの各場面について、参加者は、自分が選んだA/Dの立場になって、感じることや思うこと、を記入できる表(本報告では省略)が描かれています。例えば、先に挙げた学校の職員会議の場面のやりとりを、被害者の立場を選んだ参加者は、被害生徒としてこれを聴いたらどう思うか、をイメージして、感じることや思うことを箇条書きで記入します。

③講師は、シートの表と同じものをホワイトボードに描きます。そしてA/D、それぞれの立場の言い分を全体で発表し、講師は、それらの言い分をホワイトボードに記入します。すると各立場の違い、共通性などが明確化され、特に被害者にとって、執拗にさいなまれるような厳しい包囲網が作られていることが分かります。

例示した職員会議のシーンについて、当日全体でシェアされた各立場の言い分を紹介しましょう。A) 被害者B)「自分だって船から降りたくなかった」C)「事

が終わった後も味方がいない」、他/B) 加害生徒B)「反省文も書いたし、よかったじゃないか」「大人の偽善、きれいな事、決めつけが見え見え」、他/C) 加害生徒の親B)「これ以上、全体を荒らすことはいらないでほしい」「野口君は自分で降りることを選んだはず」、他/D) 大多数の教師B)「今さら蒸し返すな」「古傷に触られたくない」、他。いかがでしょうか。ホワイトボードの表の中にこれらが整理されて書かれており、参加者はこの全体を見ながら感想を出し合うのです。

このような作業を行うことによって、単に「いじめ被害者に寄り添う」というのも容易なことではなく、様々な落とし穴の存在が理解できます。

以上を元に、参加者には次の2点について考えていただき、全体でシェアをしながら明確化する作業を行いました。

〔No.1〕先に校長の言動の例を紹介したが、このような対応は、学校側として、真剣なものであったはずである。にもかかわらず、ここには本質的な誤りがあると直感的に分かるが、それは一体何か？

〔No.2〕映画に登場した臨時担任の行動・言動は、生徒達に望ましい影響を与えたか？与えたとしたら、どのような点か？

私たちは、いじめ自殺のような重い事態に対して、「特定の立場を非難したり、原因捜しをするのみで終わる」「知らないうちに他人事の発想に陥る」

となりがちです。これらがいかに被害者不在の議論であり、何も生まないものであるか、以上のような体験学習を通じて実感しやすくなったと思われる。いじめを受けた側にとって納得できる発想・言動を探索する、よき機会となりました。広報がいき届かなかったため、参加人数は5名と少なかったのですが、充実した内容だったという感想が多くありました。

■ ホームページリニューアルと会員団体リンクのお願い

民相連のホームページがリニューアルしました。研修会のお知らせや活動予定などを随時掲載しています。また、この機関誌「そうだん」のバックナンバーも掲載していますのでぜひご覧ください。

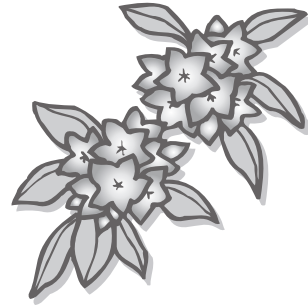
さらに、会員相互の交流や情報交換の意味で、会員団体の紹介ページも新設いたしました。会員団体の皆様にはぜひリンクをお願いいたします。ご協力いただける団体様は、以下についてお知らせください。

- ・ 団体名
- ・ リンク先のURL
- ・ URLのない場合は、連絡先（所在地・電話など）

下記宛てに送信くださるようお願い致します。

E-mail : info@minsouren.org

またはsugimoto@izoku-center.or.jp



◆ 民間相談機関連絡協議会とは ◆

地域において相談活動を行う民間の機関・団体は多数存在し、その行う領域は多岐に渡っています。

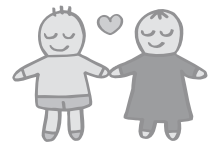
しかし、近年の社会経済情勢の変動にともない寄せられる相談内容も多様化・高度化しつつあり、各々の相談機関だけでは解決しきれないケースも増えてきていると思われ、他の機関・団体との連携した取り組みが必要となっています。

そこで、都内に所在し、相談活動を行っている民間相談機関・団体を中心に相互の連携を深め、ネットワーク化を図ることを目的として平成9年に民間相談機関連絡協議会を設立しました。

◆◆◆ 会 員 募 集 ◆◆◆

民間相談機関連絡協議会では随時団体及び個人会員の入会を受け付けております。問合せは下記宛てをお願いいたします。

E-mail:minsoren@yahoo.co.jp



— そうだん — に関するご意見・ご感想などを是非下記宛てにお寄せください。

■ 民間相談機関連絡協議会 ■

東京ボランティア・市民活動センター メールボックス 60番

〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

F A X : 03-3235-0050